

継ぎ黒部ダム堰堤についた。ダムの上から下を覗くとその放流は壯観である。一瞬身が怯みそうになった。対岸にし

ストラップがあり、後発のハイキング組が私達を待っていてくれた。ハイキング組は黒部湖の遊覧船で景観を楽しみく



第4回土佐高ハイクの会を終えて

37

土佐高ハイクの会の発端は、38回生の岡田四郎君が幹事役となり富士登山を企画したことによるものです。3年前の1997年、いつも飲み会で「一生に一度は富士山に登ろう」という声が出てもう4、5年経つが、飲んだときだけの話で段々と年をとってくるきに今年は是非とも実行に移すから37回生からも参加者を募って欲しい、ということで始まりました。当初は37、38回生が中心でした。

富士登山の帰途、思ったより早く新宿に着いて2次会となり、今回折角登山用具をそろえたのに1回限りではもったいないので来年も何処かへ行こうやとの声が大きくなり、以降1998年尾瀬、1999年乗鞍・上高地、そして今年の立山・黒部と計4回となりました。参加者の年齢層も23回生の森大先輩を頭に70回生の野町さんまで幅広くなりました。

立山より帰った翌週の日経新聞プラス1(土曜版)「何でもランキング・行ってみたい山」によると、1位尾瀬、2位富士山、3位穂高岳・上高地、4位阿蘇山、5位立山となっていました。このうち偶然にも阿蘇山以外はこの4年間で実行したことになります。続いて、6位大雪山、7位霧が峰、8位那須連峰、9位八ヶ岳・八ヶ岳高原、10位磐梯山・磐梯高原となっておりますが、来年の幹事さんには何処を選んでいただけるか楽しみです。

例年7月20日「海の日」の近辺でスケジューリングしていますので、今までお声が掛かっていない方は次回幹事38回生中島宏君まで何時でもお声を掛けていただければノミネートしておくと思います。皆様ふるってご参加ください。

つろいでいた。少し休んでから全員トローリーバスで扇沢に下り、待っていた貸切バスで当夜の白馬の旅館に着いた時は午後6時前であった。その夜は食堂で大宴会である。森先輩の乾杯の音頭に始まり酒を酌み交わしながら和気あいあいと話が弾む。生憎の雨であったがそれぞれが日中の登山あるいはハイキング等を堪

能し満足感で一杯であった。老いも若きも土佐中高の青春時代に戻り大いにはしゃいだ。一晚熟睡し翌朝5時に目が覚めた。前日ははつて変わって上天気で、朝食の後、八方尾根、北アルプスの山々をバックに記念写真を取った時は、靑空が昨日と代っていればと少々恨めしかった。オリンピックジャンプ場を見学の後、安

曇野の碌山美術館、大わさび農場に立ち寄り、中央道で無事新宿に帰り着いた。わずか2日間の小旅行には違いないが、仕事とか家庭とか世間の些事を忘れ、ただ山に登ったという何とも言いようのない満足感が残った。又来年の旅行には是非とも参加したいと思う。

思いでの先生方

山本直四郎先生

父・山本直四郎

長男 山本誠一（43回生）

父、山本直四郎は平成12年8月13日午後7時10分、肺癌にて死亡いたしました。享年78歳です。父直四郎の思い出を同窓会誌にとのご依頼をいただき、息子として家庭での父、教え子を通しての父の思い出を書かせていただきます。

父を語るとき、やはり、酒、野球、釣り、麻雀、囲碁をはずすわけにはいきません。「姓は山本、名を四郎」というツカミで授業をはじめたと思います。数学の授業の事については皆様方が詳しいと思いますので省かせていただきます。というのも、父は



若い頃、職員室で

酒の話を致します。私が土佐高を卒業するまでに父が担任をしたのは33回、36回、39回、42回です。ちょうど、日本の経済復興期、社会全体に力がみなぎっていた時代だと思えます。33回の猛者は運動会の後、居酒屋業で集まって呑んでいた様で、次の日に父に呼び出され、「おんしゃら、昨夜葉で呑

むしろ数学以外の事で先輩、同僚、生徒の皆様可愛さされたと思うからです。ただ数学の単位に関する話で、こんなことがありました。赤点をとった学生に友達が付き添いで来て、「先生、俺の点数を分けちゃってください」と父に頼んだことがありました。「よし分かった。おんしの点をわけちゃる。そしたら、お前が赤点になるぞ」「いや、それも困る。一寸、待って下さい」と言つとで、4人ぐらいに声をかけたとか、教室のカートンを洗ったかで赤点を回避したということがあったそうです。



みよつたろが」と怒られたようです。

「いや、呑んでいません」証拠はあがつちゅうに、しらすをつき通したそうです。こういう人達が正月にはまるで我が家のように私共の家にまいます。母親が大晦日



運動会で（中央）

にはおせち料理を造るのです。が、33回のある人などはすでに呑んでいました。除夜の鐘が鳴る少し前に「先生、今年はお世話になりました。来年もよろしく」と言つて帰つてゆきます。この方は近所に住んでいましたので、何分もせずに「明けましておめでとうございます」と言つて、その

まま居続けです。ある年などは正月三ヶ日で一升ビンが何十本も空になつていました。

卒業生が毎年増えてゆくのは当然の理で、正月の再訪者があまりに多くなつて来ました。ある年両親は一計を案じ、玄関に難問・珍問を掲示してこの問題を解いた者のみ入室下さいといつて待ちました。が、結果的には殆ど無駄でした。

悪とも（二山人達の弁による）は玄関の問題を見ると、「失礼しました」と行つてすぐ出ていったのですが、「裏口入学です」と勝手口から堂々と入ってくるのです。又、厳格な親を持った生徒さんもおられまして、酔つて我が家に泊まった際、帰りづらくしているの、父は察して、確かに我が家に泊まりましたという証明書を書いて持たしたこともありました。二度も、三度も同じ手は使えんぞと釘を指したそうですが。

父の酒好きを端的に表す言



昭和34年頃（後列中央）

葉に、「直四郎、行きは7分、帰りは3時間」というのがあります。当時、北新町に住んでおりまして、出勤は自転車で7分ですみます。帰りは途中で中種の飲屋街がありますので、一寸、寄り道をちよくちよく、帰ってくるのはすぐ分かります。一寸先からその時々流行歌がなり立てて来るからです。「無法松の一生」、「一週間に十日来い」などはじっくり、子供の身体にしみ入ったものです。あの昭和45年公風10号の時、私たちは祖父の葬式で母の実



阿川弘之の小説を下敷にした、倉本聰のシナリオ「舷燈」を読み返した。

主人公の牧野は、戦争体験を書く作家だが、それを知つてある居酒屋に居合わせた学生が絡んでくる。議論が噛み合わない。牧野は怒りを抑えて云つ、「昔はネ、親と子、先生と弟子、先輩と後輩の間には、礼節を重んじたもつと親しい会話があつたもんだよ」とすると学生はすかさず「礼節とは何ですか」と反発する。傍らで聴いていたおかみが、たまりかねて一喝する。「礼節というのね、目上の人には目上の人に対する、知らない人には知らない人に対する口のきき方があるんだよ」と昭和四十年代の昔の胸のすくセリフだ。そつ。ことばのはしばしにも自ら出てくる、他人への尊敬、思いやり、優しさ、が礼節だ。それがいまは、五千万円も

中学生にたかる奴。殺人を経験してみたいと無造作に人を殺す高校生。世も末とはこんな世の中のことだ。礼節という日本語が時の流れにおき去りにされていく虚しさを、今私は実感している。こんなに乱れて、これからの日本はどうなるのかと思つ。果して礼節は取戻せるか。

そんな矢先、先日テレビで神戸の定時制工高の卒業生のドキュメントを見た。

泣き虫 弱虫 怒り虫

礼節は取り戻せるか

夜間の定時制に通う元不良の長沢くんは、何度毛職を転々とし、やっと気に入つた工務店に入れた。あるとき足腰の弱つた老人の家の修理を委された。老人は修理の進具合が気になるが、動けない。それを察して長沢くんは老人を車椅子で外に出し、自分の仕事ぶりを見せた。親方はそのことを老人からあとで聞いて、長沢くんの優しさを見直したという。老人に思いやりをみ

せ、自らはそれを云わない。貧しさにめげないそんな若者に礼節のころがあったことに、世の中まんざらすてたもんじやない、と妙にホツとした。

そつ云えば私の身边にも、たとえばある朝、駅の小さなエレベーターを降りると、通学の女子学生が屯して出て口をふさいでいる。若いもんは歩けばいいのに、と内心思いつながら「降りる方がさきだろ、通してよ」と云つと、素直に黙つて後ずさりして通路を空ける。云われたらする、のが気に入らないが、本当はそつすべきだと思つていてもそれができない。何かキツカケを待つてるんだな、と考える。

だとすると、人間こころの中に潜む礼節の芽を引出す手段は、大人たちからの呼びかけからはじめるべきではないか。他人にいいことをしたときの爽やかな喜びをいかに感じるかということだ。礼節のこころは育まれていく筈だ、と思つ。と云いながら、一方でそんなことお構いなしのあまりにも身勝手が多いことに、自分の云っていることばの空回りを感じているのだが。

家に行き、北新町には後で合流予定の父しかいなかったのですが、水位が上がる中借家の2階へ持つて上がったものは電話と一升ビンだけでした。じつと、水がくるのを見ていたそつです。その後、たらいに酒とビールと水を入れて泳いで来た教え子の方と酒宴になりました。

もう時効でしょうから構わんと思いますが、当時は卒業式が終わると、私共の家に卒業生が来まして酒盛りとなるわけです。父も下手に街で騒がれるよりましと思つたのでしよう。ある年など、来た卒業生に黒板に名前を書いてゆけといった処、50〜60人位になったと思ひます。又、卒業記念に炊飯器を頂戴した事がありました。その方々は次の日にその炊飯器で炊いた朝食を食べてゆきました。

釣りについてはマニアックです。とくにチヌ(黒鯛)は潮の干満に応じて夜中でも、早朝でもおかまいなしです。昼間にゴカイを掘り、後はチヌの都合に合わせてます。ハゼ、エバ、手長海老すくい、鯉、真好きでないとやらない釣りです。麻雀のメンツは学校と関係のない人が多かったよう



二人の愛息と

に思ひます。県庁、京染屋、運送会社の方などで二日ぐらの徹夜は平気でした。リンゴ箱でも勉強はできるといつて、子供達の試験期間中もおかまいなしです。

本人は野球の経験が無いのですが、野球部は気に入つてやつていたよつです。籠尾先生にバトンタッチしてからは裏方に回り、高野連の仕事をさせて頂き、それなりに職務をまっすきたと思ひます。将棋、そつそつ、パチンコと色々な話がありますが、この辺で。

土佐湾と高野川の魚(イオ)を大分、してちゆうぎ、骨でもまいて、動弁してもらつてくれ。これが本音かも知れませぬ。

現在、主婦業を入れると、数足のワラジをはいています。その主な一つは、この6月まで6年間代表を務めたボランティア活動です。それに関わるようになってから、いつの間にか14年になります。それは、海外で1年以上生活した母親と子どもの集まりで、21年前、英国大使館に夫が勤務していた一英国夫人と、海外



活動メンバー達と（後列左から3人目）

から帰国した3人の母親と、その子ども達でスタートした「文庫活動」です。その頃、帰国子女はイジメの対象であることが少なくありませんでした。そうした子ども達に一種のオアシスを提供し、せつかく体験してきた他国の文化や言語を維持させひいては日本人として国際理解を深める芽を育む場を、

との願いからでした。現在もボランティアのネイティブ・スタッフと母親が運営しています。英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏と、それぞれ子ども達が暮らした国の言語で、子ども達に本を読み聞かせることを中心に活動しています。十数年前、夫の仕事の関係で、当時カタコトの日本語を話し始めた息子とともに家族3人でイギリスで2年余り暮らししました。多少は話せると思っていた英語でしたが、相手の話が速くて聞き取れなかったことがまずショックでした。聞けなければ話せません。そして郊外に住む普通のイギリス人の母親にとつて、英語が話せないことは相手にする価値がないということであり、とんちんかんカタコト英語につき合うことは時間の無駄と感じられるらしいことに、再度カルチャーショックを受けました。母親と子どもの集まりに参加させてもらったものの、半年ほどは母子ともども透明人間にされて苦勞をしました。相手を無視して冷たくあしらう様子を、イギリスでは「カーテンウォールがかかったかのよう」と、慣用的に表

44

現すると近所のイギリス人のおばあちゃんに後で聞いたのですが、まさしくその通りでした。無視されても無視されても下手な英語でトライする他ありませんでした。生活にも慣れ、友人もでき、私の英語も「心臓の毛の数で勝負している」と夫から言われ、息子も耳から入った英語を流暢に話すようになった頃、帰国となりました。

幼少期、耳から入った英語は覚えるのも速いが忘れるのも速いものです。自分のような目に遭わないためにも、せつかくの体験をそのまま息子が活かせたらと思いました。成長とともに、息子は「文庫」から離れていきましたが、この小さな、縁の下の力持ち的活動は無駄ではないと思うようになり、母親の方は運営に深入りしていつてしまいました。

現在、この組織は、海外での日本語文庫としても普及し、国内外合わせて50以上の文庫を運営しています。昨年、20周年を迎え、記録映画社をはじめたくさんの方々へ支援していただき、それまでの歩みを映像として残すことができました。代表を務め終えた今



ロンドン支部での文庫20周年にて（右端）

は、若いお母さん達をバックアップしながら、われわれの活動の歩みとしてのみならず、幼児期の他言語習得にも役に立つこの映像の紹介をしていく予定です。映像紹介の皮切りは本年東京で7月、ロンドンでは日本大使館共催で9月に行われました。特にロンドン支部では、来年イギリス各地で草の根的に開催される予定の日本展に各地をまわってこの映像を紹介し、東京でも、国際子ども年の今年、色々な所で紹介していく予定です。お声がかかれば、風呂敷に背負ったビデオを持って馳せ参じますので皆様方よろしくお願ひします。

今こんなことしてきます

21